

101 視覚
芸術

ミケランジェロ

ミケランジェロ（1475～1564）は、イタリア盛期ルネサンス最高の芸術家と見なされることが多い。画家・建築家・詩人・土木技師として天賦の才に恵まれていたが、本人は何よりも彫刻家を自任していた。彼の伝記を書いたジョルジョ・ヴァザーリは、ミケランジェロは無生物である大理石に生命を吹き込むことができると述べている。



ミケランジェロは、1475年、トスカナ地方の町カプレーゼに生まれた。若いころから傑出した才能の持ち主で、メディチ家当主ロレンツォ・イル・マニフィコを囲む知識人・芸術家サークルに招かれて参加した。フィレンツェからローマに移ると、『ピエタ』（聖母マリアが死んだイエスの遺体を見て嘆く姿）の彫刻制作の依頼を受け、1499年に完成させた。1501年にはフィレンツェに戻り、有名な彫刻『ダビデ像』を制作した。その数年後、ローマに呼び戻されると、教皇ユリウス二世から、自身の廟堂のため、実物大より大きい40体の彫像から成る精巧な墓碑を設計・制作してほしいと頼まれた。しかし、この仕事はすぐに中断された。当の教皇本人から、ヴァチカン宮殿内にあるシスティナ礼拝堂の天井全面に絵を描いてほしいと新たに依頼されたからだ。若きミケランジェロは、フレスコ画を描いた経験がほとんどなかったが、この依頼をわずか四年で完成させた。

天井画が完成すると、ミケランジェロは教皇の墓碑の仕事に戻り、1513年から1516年のあいだに『モーセ像』と『瀕死の奴隷』を制作した。ユリウス二世は廟堂が完成する前に死に、遺族は度を越した墓碑に大金を支払う気がなかったため、ミケランジェロは自らの設計した墓碑を完成させることができなかった。落胆した彼は、その後の20年間の大半を、強力なメディチ家のために、さまざまな仕事をして過ごした。この時期の最も有名な作品が、サン・ロレンツォ聖堂にあるメディチ家廟堂である。

1534年にミケランジェロは、システィナ礼拝堂の祭壇壁画にフレスコ画『最後の審判』を描くためローマに戻った。この作品で彼は署名代わりに、皮剥ぎの刑で殉教した聖バルトロマイの剥がされた皮を自分に似せて描いている。壁画を完成させた数年後、教皇パウルス四世は『最後の審判』に描かれた裸体を宗教画として不適切と考え、腰布を描き加えさせた。この腰布は、近年の礼拝堂修復の際に多くが取り除かれた。

ミケランジェロは、ルネサンス期ローマの都市計画でも成功を収めた。1537年、彼は古代ローマの中心だったカピトリノの丘の頂上にある空き地の再整備を依頼された。その九年後には、新たなサン・ピエトロ大聖堂の建築主任に任命され、有名なドーム（丸屋根）を設計したが、残念なことに完成を生前に見ることはできなかった。彼はローマで89歳で亡くなった。

豆知識

1. システィナ礼拝堂天井画の『アダムの創造』で、ミケランジェロは神を、空中に浮かぶ天使たちが作る楕円形の中に描いた。近年、ブラジル人医師ジウソン・バハートとマルセロ・ジ・オリヴェイラの二名から、この楕円形の構図はミケランジェロが人間の脳の断面図を意図的に使って構成したものだという説が出された。

122 視覚
芸術

ラファエロ

レオナルド・ダ・ヴィンチとミケランジェロと並んで、ラファエロ（1483～1520）はイタリア盛期ルネサンスの三大芸術家のひとりと考えられている。



ウルビーノ近郊に生まれたラファエロは、父ジョヴァンニ・サンティから絵の指導を受けた。息子の才能に気づいたジョヴァンニは、ラファエロを当時ウンブリア地方で随一の画家だったピエトロ・ペルジーノの工房へ入れた。1504年にラファエロは、芸術の中心地だったフィレンツェに移った。ミケランジェロやレオナルド・ダ・ヴィンチの作品を研究したラファエロは、両者の要素を結びつけて独自のスタイルを作り上げた。1508年、ラファエロは教皇ユリウス二世からローマに呼ばれ、教皇居室の装飾を依頼された。最初の部屋は、教皇の図書室だったらしく、ここにラファエロは、四つの主要学科である神学、哲学、法学、詩学のフレスコ画を描いた。このうち最も有名な哲学は、のちに『アテネの学堂』と命名され、プラトンとアリストテレスが古代ギリシアの偉大な思想家たちに囲まれている様子が描かれている。

ラファエロはその後ローマにとどまり、短い人生の中で多くの作品を生み出した。祭壇画や祈禱用の絵画のほか、神話画も描いている。そのひとつ『ガラティアの勝利』は、1512年に依頼を受けて邸宅ヴィッラ・ファルネジーナのために制作したもので、巨人ポリュペモスにつきまとわれる海の精ガラティアが描かれている。ラファエロは建築家としても名声を獲得し、サン・ピエトロ大聖堂の建て替え工事では、最初の設計者ドナート・ブラマンテが1514年に亡くなると、跡を継いで建設作業の監督を任された。肖像画家の才能もあり、腕前はバルダッサレ・カスティリオーネ（1478～1529）の肖像画に見ることができる。カスティリオーネは著名な外交官・文筆家で、ルネサンスを論じた有名な著書『廷臣論』（1528年）には、ラファエロについて言及した箇所もある。

ラファエロが描いた聖母子像の中でも、とりわけ有名な『サン・シストの聖母』（または『システィナの聖母』、1512～1514年）は、聖母子がふたりとも通常とは異なり険しい表情をしているため、議論を巻き起こしてきた。最近の研究によると、作品がもともとあった教会では聖母子が十字架像を見つめる位置に絵が置かれていたため、そうした表情になったようだ。

一般にラファエロは、ルネサンスの三大巨匠の中で最も古典的だと言われている。ドイツの文豪ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749～1832）は、こう述べている。ラファエロは古代ギリシア人を模倣する必要がなかった。なぜなら彼は、古代ギリシア人のように考え感じるものが当たり前のようだったのだから、と。

豆知識

1. ラファエロの最も古い伝記は、ジョルジョ・ヴァザーリの『芸術家列伝』（1550年）に含まれているものだ。
2. 『アテネの学堂』では、プラトンが天を指さして、抽象的・天上的な概念に関心を抱いていることを示しているのに対し、アリストテレスは地面に手を向けて、具体的な対象物と現世の出来事の方に興味があることを表している。
3. ラファエロは、地中に埋もれていたネロの黄金宮殿「ドムス・アウレア」などローマの遺跡の探検もしていた。